

C. そ の 他

I 発表論文抄録

1. 咽頭ぬぐい液中のヒトロタウイルス

梅津 幸司 白地 良一 山本 仁
今野 二郎 永井 武夫* 鈴木 宏**
石田名香雄**

ヒトロタウイルスが急性期患者の咽頭ぬぐい液中にR・

PHA法とIEM法で確認された。この成績から、ヒト
ロタウイルスの感染経路は糞口感染経路の外に飛沫など
による口から口への感染経路も存在する可能性が示唆さ
れた。(医学のあゆみ 121, 482, 1982)

* 永井小児科

** 東北大学医学部細菌学教室

2. ヒトロタウイルスの分離

梅津 幸司 白地 良一 今野 二郎
千葉 良* 永井 幸夫** 海老名卓三郎***
石田名香雄***

培養不能とされてきたヒトロタウイルスの培養に成功

した。細胞変性効果が不明瞭なので別報の方法で細胞中
の増殖ウイルスを検定し、6代まで継代することに成功、
6代目で初代から計算すると、 10^{16} 倍まで増殖してい
ることを確認した。

* 仙台赤十字病院

** 永井小児科

*** 東北大学医学部細菌学教室

(医学のあゆみ 121, 330, 1982)

3. 風疹患者血清中の特異IgM抗体 の消長とその意義

秋山 和夫 白地 良一 石田名香雄*

ELISA法を用い、風疹IgM抗体とIgG抗体を分別
測定した。その成績より、風疹発症後1週間以内にIgM

抗体を産生し、ほぼ2カ月間持続するが、3~4カ月持
続するものも6%存在した。又、IgM抗体、IgG抗体の
出現消長の時期から逆算して、ウイルスの感染時期が推
定できた。(臨床とウイルス 10, 75, 1982)

* 東北大学医学部細菌学教室

4 魚介類中からのMolinate, Benthocarb 及びButachlorの検出及び定量法の検討

佐藤 信俊 鈴木 滋 加茂えり子
高槻 圭悟 牛沢 勇 塚 敬一

食品衛生学雑誌, 23(6), 456~461(1982)

5~6月に採取された魚介類のn-ヘキサン抽出物中にNP-FID/GCに高感度な数種の未知成分を検出し、シリカゲル、硝酸銀フロリジルカラムで精製後GC/MSで検討した結果、これらの未知成分は、我が国で水田除草剤として多用されているmolinate(S-ethyl hexahydro-1H-azepine-1-carbothioate), benthocarb(S-p-chlorobenzyl diethylthiocarbamate) およ

びbutachlor(2-chloro-2',6'-diethyl-N-(butoxymethyl)acetanilide)であることが判明した。又、アセトニトリル、n-ヘキサン抽出後硝酸銀フロリジルカラムで精製しNP-FIDで測定する残留分析法を開発し、その添加回収率は2.5ppmにおいて各除草剤91~112%であった。

5. CNP代謝物の魚介類中残留

鈴木 滋 佐藤 信俊 高槻 圭悟
加茂えり子 菊地 秀明 牛沢 勇
塚 敬一

食品衛生学雑誌, 24(2), 187~193(1983)

水田除草剤のCNP(chlornitrofen)は環境中で容易にそのニトロ基の還元が行われ、アミノ誘導体に変換する。このことから5~6月の期間中CNPに汚染された魚介類について、CNP還元代謝体の検索を行い、その残留汚染物として新たにCNP-acetamide(CNP-a)およびCNP-formamide(CNP-f)を検出した。

さらにこれらの残留分析法を確立し宮城県内一定地点の試料について残留の経時変化の調査を行った。この結果5~6月の除草剤使用時期とはほぼ一致して高い残留値を示し、その最高値はシジミ中で、0.58ppm(CNP-a), 0.24ppm(CNP-f)を示したが、7月以降は速やかに減少し、長期残留性は認められなかった。

6. 建屋臭気の意味するもの〔I〕

氏家 国夫* 八木 純 佐藤 春雄

排出口規制が進んだ現在でも悪臭苦情が減少しないため、その原因をつきとめるべく、それぞれの発生源の排出強度(Odor Emission Rate)を求めると共に、総

排出強度(Total Odor Emission Rate)を求め建屋臭気がどのような影響を与えているかを求めたところ、臭気排出強度は約 10^{5-6} の範囲にあり、この臭気単独でも公害を引き起こす可能性が十分あることが判明した。

* 現 宮城県仙塩流域下水道

(悪臭の研究 12, 54, 1982)

Ⅱ 学 会 发 表

II 学 会 発 表

1. 高木式によるLegの推定精度および数値シミュレーションによるLdnについての一考察

小室 健一 加賀谷 秀樹 菊地 英男 小野寺 恒之*
電子通信学会騒音研究会 1982年8月20日(仙台) (*現 宮城県公害規制課)

2. 多発性硬化症の麻疹抗体陽性牛初乳による治療の試み

梅津 幸司 麻生 久* 佐藤 昭夫* 海老名 卓三郎*
石田 名香雄* (*東北大・医・細菌)
第30回日本ウイルス学会 1982年11月10日~12日(京都市)

3. 白地抗原と非A非B型肝炎

白地 良一 尾関 恒雄* 田岡 賢雄* (*産業医大・内科)
第24回日本消化器病学会 1982年10月14日~16日(山形市)

4. 非A非B型肝炎の抗原抗体系

白地 良一
厚生省特定疾患難治性の肝炎研究班総会 1982年2月10日(東京)

5. 非A非B型肝炎ウイルス関連抗原の検索

白地 良一 新妻 沢夫 館田 朗* 菊地 金男*
石田 名香雄** (*国立仙台病院) (**東北大・医・細菌)
第31回東北公衆衛生学会 1982年7月21日(仙台)

6. ワイル病予防接種における予防接種歴と抗体の消長

小原田 奈美* 遠藤 好喜 新妻 沢夫 白地 良一(*現 登米保健所)
第31回東北公衆衛生学会 1982年7月21日(仙台)

7. HBe抗原抗体の検出と問題点

白地 良一
第3回衛生微生物技術者協議会研究会 1982年7月8日~9日(仙台)

8. 食中毒様症状の集団発生に証明された新型ウイルス

梅津 幸司 白地 良一 山本 仁 湯田 和郎
新妻 沢夫
第19回宮城県公衆衛生学会学術総会 1983年2月18日(仙台)

9. 風疹の血清疫学と流行予測

秋山 和夫 山本 仁 新妻 沢夫
第19回宮城県公衆衛生学会学術総会 1983年2月18日(仙台)

10. ストレプトコッカスB群に対するインフルエンザウイルスの吸着

助野 典義 小原田 奈美* 菊地 由紀**
(*現 登米保健所) (**現 成人病センター)
第36回日本細菌学会東北支部総会 1982年8月27日~28日(仙台)

11. 弁当、惣菜製造所における原料の入荷状況および調理器具などの黄色ブドウ球菌の汚染状況
湯田和郎 尾形芳明* 高野 修* 伊達洋司**
(* 仙台市北保健所) (** 宮城学院女子大学)
第19回宮城県公衆衛生学会 1983年2月18日(仙台)
12. マーケットバスケット法による日常食品からの汚染物摂取量調査(Ⅱ)
佐藤信俊 高槻圭悟 百川 滉 山田わか
小野研一 鈴木 滋 菊地秀明 加茂えり子
牛沢 勇 塚 敬一
第31回東北公衆衛生学会 1982年7月21日(仙台)
13. 水田除草剤の魚介類中残留(Ⅱ)
鈴木 滋 佐藤信俊 高槻圭悟 加茂えり子
牛沢 勇 塚 敬一
第19回全国衛生化学技術協議会 1982年9月21日(京都市)
14. 食品中の残留農薬分析
佐藤信俊 鈴木 滋 牛沢 勇 塚 敬一
昭和57年度化学系8学協会連合東北地方大会 1982年10月1日(盛岡)
15. 有機リン系殺菌剤(IBP)の魚介類中残留
鈴木 滋 佐藤信俊 高槻圭悟 牛沢 勇
塚 敬一
第21回日本薬学会東北支部大会 1982年10月24日(仙台)
16. 食品中重金属分析における前処理法の検討 —硫硝酸分解での鉛の回収—
菊地秀明 百川 滉 佐藤信俊 加茂えり子
牛沢 勇
第21回日本薬学会東北支部大会 1982年10月24日(仙台)
17. 宮城県における食事からの突然変異原性物質摂取量調査(第1報)
菊地秀明 佐藤信俊 牛沢 勇
第19回宮城県公衆衛生学会学術総会 1983年2月18日(仙台)
18. 本県におけるガン死亡率と水道水等の環境要因との関係における統計的解析
清野 茂 庄司 晃子 千葉 規 郡山 力
一ノ渡 義巳*
(* 大崎保健所)
第19回宮城県公衆衛生学会 1983年2月18日(仙台)
19. 仙台湾沿岸地域におけるオキシダント高濃度事例について
加藤 憲治
第8回北海道・東北ブロック公害研研究連絡会議 1982年9月9日~10日(札幌)
20. スパイクタイヤ装着地域における道路粉じん実態について
加藤 愛子
第8回北海道・東北ブロック公害研研究連絡会議 1982年9月9日~10日(札幌)

21. スパイクタイヤ装着地域における道路粉じん実態調査 — B(a)P について —

北村 洋子 加藤 愛子 安倍 睦夫 加藤 謙一
森 泰明 狩野 敏郎

第21回日本薬学会東北支部大会 1982年10月24日(仙台)

22. スパイクタイヤ装着地域における道路粉じん実態調査について

加藤 愛子

第9回環境保全, 公害防止研究発表会 1982年11月30日~12月1日(東京)

23. スパイクタイヤ装着地域における道路粉じん実態調査

加藤 愛子 安倍 睦夫 加藤 謙一 北村 洋子
森 泰明 狩野 敏郎

第19回宮城県公衆衛生学会 1983年2月18日(仙台)

24. 宮城県北部の主要河川の濃縮毒性調査と毒性解析

柳 茂 大内 習一 鎌田 正弘 小泉 俊一
斎藤 善則 佐藤 春雄

第9回環境保全, 公害防止研究発表会 1982年11月30日~12月1日(東京)

25. 宮城県内における活性汚泥処理施設の実態調査および浄化槽の季節的变化について

斎藤 善則 佐藤 秀夫 佐々木 俊行 鎌田 正弘
郡山 力

第19回宮城県公衆衛生学会 1983年2月18日(仙台)

26. 人為汚濁の少ない人造湖における環境基準の保守について

佐々木 俊行

第8回北海道・東北ブロック公害研究連絡会議 1982年9月9日~10日(札幌)

27. 建屋臭気の意味するもの

氏 家 国 夫* 八 木 純 (*現 宮城県仙塩流域下水道事務所)

第23回大気汚染学会 1982年11月9日~11日(宮崎市)

Ⅲ 業績研究会

第 1 回

宮城県保健環境センター業績研究会

と き 昭和 58 年 3 月 18 日 (金) 9:00~17:10

と ころ 宮城県保健環境センター大会議室

〔午 前 の 部〕 9 時 20 分～

座 長 市 川 敬 典 (環境調整課)

1. B Ldn 予測モデルについて

保健環境センター情報管理部 ◎加賀谷秀樹 小室 健一 菊地 英男 佐藤 春雄

2. A 宮城県における感染症サーベイランス事業

保健環境センター微生物部 ◎山本 仁 湯田 和郎 遠藤 好喜 川野 みち
佐久間 隆 白地 良一 助野 典義 秋山 和夫
梅津 幸司 沖村 容子 清野 陽子 小原田奈美
日下 富子 奥山 駿吉 新妻 沢夫

3. B 水道におけるカビ臭の測定方法について

保健環境センター環境衛生部 ◎木戸 一博 千葉 規 郡山 力

座 長 鈴 木 弘 一 (環境調整課)

4. B 航空機騒音の評価方法について

保健環境センター特殊公害部 ◎菊地 英男 三浦 健潤 平間 一男 佐藤 春雄

5. A 柴田町船岡地区における NO₂ 濃度分布調査について保健環境センター大気部 ◎北村 洋子 安倍 睦夫 加藤 愛子 加藤 謙一
森 泰明 狩野 敏郎

6. B ICP による多元素同時分析

— 底質試料について —

保健環境センター水質部 ◎高橋紀世子 大内 習一 木村 茂 小泉 俊一
柳 茂 佐藤 秀夫

座 長 清 水 正 夫 (公害規制課)

7. B イオンクロマトグラフィーによる臭素酸カリウムの分析について

保健環境センター理化学部 ◎百川 滉 菊地 秀明 山田 わか 牛沢 勇

8. A 建屋臭気について

保健環境センター特殊公害部 ◎八木 純 氏家 国夫 佐藤 春雄

〔午後の部〕 12時45分～

9. B スパイクタイヤ装着地域における道路紛じん実態調査 (第二報)

保健環境センター大気部	◎加藤 愛子	安倍 睦夫	加藤 謙一	北村 洋子
	森 泰明	狩野 敏郎		

座長 早坂 国夫 (原子力安全対策室)

10. B 氷豆腐中油脂の酸化, 過酸化物質について

大崎保健所	◎石川 潔	松永 良子	細矢 義隆	船木 宏
	遠藤 誠	安藤 孝志	臼井 文則	田口 五郎
	只野 尚盛	千葉 成美		

11. B 豚肝臓の組織所見について

仙北食肉衛生検査所	◎御代田恭子	と畜検査員一同		
-----------	--------	---------	--	--

12. B Opportunistic infectionの原因菌非発酵グラム陰性桿菌について

栗原保健所	◎和田 正	三上 雪乃	大場 修	石川 淑
	中屋 康男			
成人病センター	高橋喜久男	白井 克彦		

13. B 最適指標植物の調査

— よもぎの放射能について —

原子力センター	◎藤原 秀一	中村 栄一	菊地 格	滝島 哲夫
---------	--------	-------	------	-------

座長 及川 良一 (環境衛生課)

14. A 水田用農薬の魚介類中残留

保健環境センター理化学部	◎鈴木 滋	佐藤 信俊	高槻 圭悟	加茂えり子
	菊地 秀明	牛沢 勇	堺 敬一	

15. B CNP類の突然変異原性

保健環境センター理化学部	◎佐藤 信俊	鈴木 滋	菊地 秀明	牛沢 勇
	堺 敬一			

16. B 工場・事業場における有害物質等取扱い実態調査 (第一報)

保健環境センター大気部	◎安倍 睦夫	加藤 愛子	加藤 謙一	北村 洋子
	森 泰明	狩野 敏郎		

座長 飯塚 武一 (公衆衛生課)

17. B 風疹患者血清の特異IgM抗体の消長とその意義

保健環境センター微生物部	◎秋山 和夫	白地 良一		
--------------	--------	-------	--	--

18. B ウイルス性胃腸炎における中和抗体の新しい検出法

保健環境センター微生物部	◎梅津 幸司	白地 良一		
--------------	--------	-------	--	--

19. A 伊豆沼における水質汚濁の現状

保健環境センター水質部	◎田中 和郎	鎌田 正弘	佐々木俊行	高橋紀世子
	佐藤 秀夫			
大崎広域水道事務所	高橋 正弘			

座長 加藤 信男 (業務課)

20. B 排水処理施設の維持管理に関する調査研究

— 活性汚泥の性状と浄化能との関係について —

保健環境センター水質部	◎斉藤 善則	鎌田 正弘	佐々木俊行	田中 和郎
	木村 茂	柳 茂	佐藤 秀夫	
環境衛生部	郡山 力			

21. B ガスクロマトグラフィーによるフェノールおよびフェノール類の定量法

保健環境センター環境衛生部	◎菅原 隆一	木戸 一博	千葉 規	郡山 力
---------------	--------	-------	------	------

22. B 溶連菌より抽出されたインフルエンザの凝集抑制因子

保健環境センター微生物部	◎助野 典義	小原田奈美		
--------------	--------	-------	--	--

23. A 本県におけるガン死亡率と水道水等の環境要因との関係における統計的解析

保健環境センター環境衛生部	◎清野 茂	庄司 晃子	千葉 規	郡山 力
大崎保健所	一ノ渡義巳			

Ⅳ 談 話 会

談 話 会

幅広く公衆衛生上の知見を得ることを目的として、所内外の講師に総説・最近のトピック、現在の試験研究内容等の話題を提供していただき討論していく会です。

原則として、毎月第3木曜日午後1時15分から所内会議室において開催します。

なお、昭和57年8月1日に衛生研究所と公害技術センターが統合し保健環境センターとなったのにもない、従来の「衛研談話会」を「談話会」と改称しました。

- 第19回 (昭和57年4月30日)
- 神経芽細胞腫について (微生物部) 沖村容子
 - 貝毒——最近の進歩 (理化学部) 菊地秀明
- 第20回 (昭和57年5月25日)
- 担癌生体中の核酸物質 (総合衛生学院) 斎藤紀行
- 第21回 (昭和57年6月30日)
- 水のかび臭と藻類 (環境衛生部) 郡山力
- 第22回 (昭和57年7月26日)
- 生態学的健康観 (地域保健課) 伊田八洲雄
- 第23回 (昭和57年8月31日)
- ビデオ (宮城県獣医師会提供)
 - 豚のトキソプラズマ病
 - 薬剤耐性菌の知識
- 第24回 (昭和57年9月29日)
- 非イオン界面活性剤について (環境衛生部) 秋野正造
 - ネズミの生態 (微生物部) 小原田奈美
- 第25回 (昭和57年10月28日)
- 繊維と健康 (宮城学院女子大学) 伊達洋司
- 第26回 (昭和57年11月25日)
- 道路粉塵問題について (I) (大気部) 森泰明
 - 抗体保有状況からみた風疹の流行予測 (微生物部) 秋山和夫
- 第27回 (昭和57年12月23日)
- 合成樹脂の添加剤 (理化学部) 小野研一
 - 道路粉塵問題について (II) (大気部) 加藤愛子
- 第28回 (昭和58年2月24日)
- リモートセンシングについて (情報管理部) 加賀谷秀樹
 - 飲料水と健康 (環境衛生部) 清野茂
- 第29回 (昭和58年3月28日)
- 人体病害動物入門(その1)——節足動物—— (微生物部) 山本仁

宮城県保健環境センター年報執筆要領

1. (原稿の種類) 調査, 研究論文および資料とする。
2. (原稿の執筆規定)
 - 1) 原稿はB 5判(20×20字)横書き原稿用紙に楷書で明瞭に書く。
学術用語は学会の慣例に従う。
 - 2) 原稿は表題, 著者名, 序文(またははじめに), 方法, 結果, 考察(または結果と考察), 謝辞, 参考文献の順序に準じて記載する。
資料も原則として, この順序に従って記載する。
 - 3) 著者に他機関の人を含む場合は, *印を付して脚注に記載する。
 - 4) 参考文献は, 最少限にとどめ, 本文中の引用箇所(1), 2)~4)のように肩番号を付して示す。
〔記載方法〕
 雑 誌:著者名:雑誌名, 巻, 頁(西暦年)
 単行本:著者名:書名, 版数, 頁, 発行所(西暦年)
 - 5) 図, 表は別終に記載し, 表題を付け(表の題は表の上に, 図の題は図の下に), それぞれ図1, 表1のように一連の番号を付け, 本文のあとにまとめて綴る。
図表の入る位置は, 本文中に赤字で示す。
図はそのまま製版できるようにA 4判の指定用紙(オストリッチグラフ用紙)に, 黒インクで丁寧に書く。
 - 6) 写真は, 使用が不可欠の場合のみ, 強いコントラストを示すものに限って受付ける。
3. (原稿の提出) 原稿は所定の期日までに, 各部の編集委員に提出する。
執筆規定に従っていない場合は, 書き直しを求める場合がある。
原稿は返却しないので, 各自必要に応じコピーをとっておくこと。

編 集 後 記

昭和57年の年度途中8月1日に、総合衛生センター、衛生研究所および公害技術センターの3機関が統合されて、保健環境センターとして発足したので、従来の衛生研究所年報と公害技術センター報告を廃刊して、ここに本センター年報の創刊号としてとりまとめることが出来ました。

日常業務の中で研究報告をまとめることは大変なことと思いますが、研究者の努めでもあり、今後とも着実に研究成果を積み上げていきたいと思ひます。

今後は、編集方針に科学技術庁で策定した科学技術情報流通技術基準（SIST）について編集委員会で検討して、より充実した年報を作りたいと考えております。

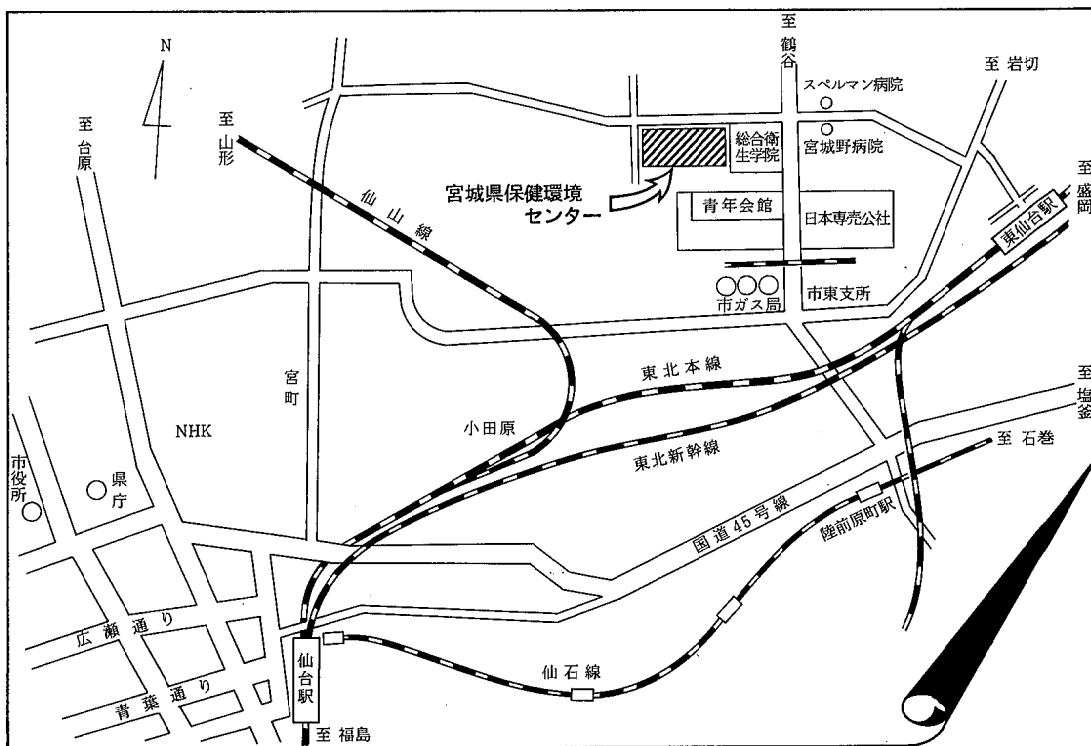
最後に、発刊に際しご尽力頂いた編集委員各位に厚く御礼申し上げます。

(佐藤 記)

編 集 委 員

- | | | |
|---------------|-----------|---|
| 佐 藤 春 雄 (委員長) | 柳 | 茂 |
| 郡 山 力 | 加 藤 謙 一 | |
| 星 孝 樹 | 加 賀 谷 秀 樹 | |
| 平 富 貴 | 百 川 和 子 | |
| 秋 山 和 夫 | 佐 藤 博 明 | |

宮城県保健環境センター



宮城県保健環境センター年報 第1号
(昭和57年度)

印刷 昭和58年12月20日

編集発行 宮城県保健環境センター

〒983 仙台市幸町四丁目7番2号

電話 0222-57-7181 (代)

印刷所 (有) イシカワ印刷

電話 0222-98-0993 (代)